

# 令和6年度 農作物病虫害発生予察情報 発生予報 第2号（6月予報）

令和6年5月28日 秋田県病虫害防除所

◇今回の予報対象期間は6月を主とします。次回の発表は令和6年6月25日の予定です。

◇病虫害発生予察情報は秋田県公式ウェブサイトで閲覧できます。

<https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/>

◇最新の農薬登録状況は、農林水産省ウェブサイト「農薬登録情報提供システム」で確認してください。<https://pesticide.maff.go.jp/>

◇病虫害発生予察情報の発表をお知らせするメールマガジンはこちらのウェブサイトで読者登録できます。<https://www.e-komachi.jp/>

◇秋田県総合防除計画を策定しました。本計画は、秋田県公式ウェブサイトで閲覧できます。<https://www.pref.akita.lg.jp/pages/archive/4233>



秋田県病虫害防除所  
トップページ

## I. 予報の要点

|     |                                                                                                                                                                                                                             |
|-----|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 水 稲 | <p>いもち病の感染量は平年並と予想されます。余り苗は直ちに処分してください。また、水面施用剤（オリゼメート粒剤、ルーチン粒剤）を使用する場合は、移植栽培では6月15日頃、直播栽培では6月23日頃に散布してください。</p> <p>斑点米カメムシ類（第1世代）の発生時期は早い、発生量が多いと予想されます。防除対策情報第1号を参照し、農道・畦畔、休耕田などの除草と水田内除草を行ってください。</p>                    |
| 畑 作 | <p>小麦では、赤かび病の発生量がやや多いと予想されます。防除を行っていない場合は、直ちに防除してください。</p> <p>大豆では、ネキリムシ類の発生量が平年並と予想されます。播種前には場内やほ場周辺の雑草処理を行うほか、例年被害が見られるほ場では、クルーザーMAXXなどにより防除してください。</p>                                                                   |
| 野 菜 | <p>ねぎでは、べと病の発生量がやや多いと予想されます。予防に努めるとともに発病が見られたら治療効果のある薬剤で防除してください。</p> <p>キャベツでは、菌核病の発生量がやや多いと予想されますので薬剤防除を徹底してください。</p> <p>えだまめでは、ネキリムシ類の発生時期が早く、発生量が平年並と予想されます。播種前には場内やほ場周辺の雑草処理を行うほか、クルーザーMAXXなどにより防除してください。</p>          |
| 花 き | <p>りんどうでは、リンドウホソハマキの発生量が多いと予想されます。防除対策情報第2号を参照し、防除を徹底してください。また、ハダニ類の発生量が多いと予想されます。発生初期から薬剤で防除してください。</p>                                                                                                                    |
| 果 樹 | <p>りんごでは炭疽病、輪紋病の発生が多いと予想されます。降雨が続くと予想される場合は薬剤の散布間隔を短くしてください。</p> <p>なしでは、黒斑病の発生が多いと予想されます。防除対策情報第3号を参照し、適切に防除してください。</p> <p>りんごとなしで、シンクイムシ類の発生が多いと予想されます。今後の産卵状況に注意し適期に防除してください。また、果樹カメムシ類については園内への飛来が多い場合は薬剤で防除してください。</p> |

## Ⅱ．主要病害虫の向こう 1 か月の予報

| 作目名            | 病害虫名                          | 対象地域 | 発生時期<br>感染時期 | 発生量・感染量 |       |
|----------------|-------------------------------|------|--------------|---------|-------|
|                |                               |      |              | 現況      | 予報    |
| 水 稲            | いもち病（葉いもち）                    | 全県   | 平年並          | —       | 平年並   |
|                | ばか苗病                          | 全県   | —            | 多い      | 多い    |
|                | イネミズゾウムシ                      | 全県   | 早い           | やや少ない   | 平年並   |
|                | イネドロオイムシ                      | 全県   | 平年並          | —       | やや多い  |
|                | イネミギワバエ(第2世代)<br>(イネヒメハモグリバエ) | 全県   | 早い           | やや少ない   | やや少ない |
|                | 斑点米カメムシ類(第1世代)<br>(アカスジカスミカメ) | 全県   | 早い           | —       | 多い    |
|                | (アカヒゲホソミドリカスミカメ)              | 全県   | 早い           | —       | 多い    |
|                | フタオビコヤガ(第1世代)<br>(イネアオムシ)     | 全県   | 平年並          | 少ない     | 平年並   |
| 小 麦            | 赤かび病                          | 全県   | 早い           | —       | やや多い  |
|                | うどんこ病                         | 全県   | —            | —       | 平年並   |
| 大 豆            | ネキリムシ類                        | 全県   | 早い           | —       | 平年並   |
|                | 食葉性鱗翅目幼虫                      | 全県   | —            | —       | 平年並   |
| ね ぎ            | べと病                           | 全県   | —            | 平年並     | やや多い  |
| きゅうり           | 黒星病                           | 全県   | —            | —       | 平年並   |
| キャベツ<br>(初夏どり) | 菌核病                           | 全県   | —            | 平年並     | やや多い  |
|                | コナガ                           | 全県   | —            | やや少ない   | やや少ない |
|                | モンシロチョウ                       | 全県   | —            | やや少ない   | やや少ない |
|                | ヨトウガ(第1世代)                    | 全県   | —            | 平年並     | 平年並   |
| えだまめ           | ネキリムシ類                        | 全県   | 早い           | —       | 平年並   |
|                | 食葉性鱗翅目幼虫                      | 全県   | —            | —       | 平年並   |
| りんどう           | 葉枯病                           | 全県   | —            | 平年並     | やや多い  |
|                | リンドウホソハマキ<br>(第1世代)           | 全県   | 早い           | 多い      | 多い    |
|                | ハダニ類<br>(ナミハダニ)               | 全県   | —            | —       | 多い    |

| 作目名           | 病害虫名                                                | 対象地域     | 発生時期<br>感染時期 | 発生量・感染量 |       |
|---------------|-----------------------------------------------------|----------|--------------|---------|-------|
|               |                                                     |          |              | 現況      | 予報    |
| りんご           | 斑点落葉病                                               | 全県       | 早い           | —       | 平年並   |
|               | モニリア病<br>(実(株)ぐされ)                                  | 全県       | —            | やや少ない   | やや少ない |
|               | 黒星病                                                 | 全県       | —            | 平年並     | やや多い  |
|               | 炭疽病                                                 | 全県       | 早い           | —       | 多い    |
|               | 輪紋病                                                 | 全県       | 早い           | —       | 多い    |
|               | シンクイムシ類<br>(モモシンクイガ)                                | 全県       | 早い           | —       | 多い    |
|               | ハダニ類<br>(ナミハダニ、リンゴハダニ)                              | 全県       | —            | 平年並     | 平年並   |
|               | ハマキムシ類<br>(リンゴコカクモンハマキ、<br>ミダレカクモンハマキ、<br>リンゴモンハマキ) | 全県       | —            | 平年並     | 平年並   |
|               | 果樹カメムシ類<br>(クサギカメムシ、<br>チャバネアオカメムシ)                 | 全県       | —            | やや多い    | やや多い  |
| な し<br>(日本なし) | キンモンホソガ<br>(第2世代)                                   | 全県       | —            | —       | やや多い  |
|               | 黒星病                                                 | 県北部・県中央部 | —            | 平年並     | やや多い  |
|               | 黒斑病                                                 | 県北部・県中央部 | —            | 多い      | 多い    |
|               | 輪紋病                                                 | 県北部・県中央部 | やや遅い         | —       | やや多い  |
|               | シンクイムシ類<br>(モモシンクイガ)                                | 県北部・県中央部 | 早い           | —       | 多い    |
|               | ハダニ類<br>(ナミハダニ、リンゴハダニ)                              | 県北部・県中央部 | —            | やや少ない   | やや少ない |
|               | ハマキムシ類<br>(リンゴコカクモンハマキ、<br>リンゴモンハマキ)                | 県北部・県中央部 | —            | 多い      | 多い    |
| ぶどう           | 果樹カメムシ類<br>(クサギカメムシ、<br>チャバネアオカメムシ)                 | 県北部・県中央部 | —            | やや多い    | やや多い  |
|               | べと病                                                 | 県南部      | 早い           | 平年並     | やや多い  |
|               | 芽枯病                                                 | 県南部      | 早い           | やや少ない   | 平年並   |
|               | 灰色かび病                                               | 県南部      | —            | 平年並     | やや多い  |
|               | 晩腐病(花蕾発病)                                           | 県南部      | —            | —       | やや多い  |
| 飼料作物          | アザミウマ類<br>(チャノキイロアザミウマ)                             | 県南部      | 平年並          | 平年並     | 平年並   |
|               | アワヨトウ(第1世代)                                         | 全県       | —            | やや少ない   | やや少ない |

### Ⅲ．発生予報と防除対策

#### A 水稻

| 病 害 虫 名                    | 予 報 内 容 |        |
|----------------------------|---------|--------|
|                            | 感 染 時 期 | 感 染 量  |
| 1. いもち病（葉いもち）<br>（全般発生開始期） | 平年並（－）  | 平年並（－） |

##### （1）予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並が多いと予報されている（±/+）。

イ、育苗期巡回調査（5月2～3半旬）における苗いもちの発病箱率、発病地点率はいずれも0%（平年0%）で平年並だった（ /±）。稲わら及び籾殻の確認地点率は、育苗施設内では0%（平年0.9%）でやや低く、育苗施設周辺を含めた確認地点率は1.2%（平年3.3%）で低かった（ /－）。

##### （2）防除上注意すべき事項

ア、余り苗は、直ちに泥に埋めて処分する。

イ、ベンレート水和剤又はビームゾルによる育苗期いもち防除をしなかった場合、いもち病の持ち込みや早期に伝染する可能性があるため、余り苗や本田をよく観察して発病の有無を確認する。

ウ、乾燥状態で保管された稲わらや籾殻は本病の伝染源となるので、これらを使用した野菜ほ場の周辺では葉いもちが早期に発病していないか確認する。

エ、葉いもち防除として箱施用剤や側条施用剤を使用しなかった場合は、オリゼメート粒剤を10a当たり2kg、又はルーチン粒剤を10a当たり1kgを散布する。散布時期は、移植栽培では6月15日頃（6月12～18日）、直播栽培では6月23日頃（20～25日）である。

オ、箱施用剤又は側条施用剤を使用していないほ場では、感染苗の持ち込みなどにより早期に本田で発病することがある。6月15日までに発病を確認した場合は、直ちにオリゼメート粒剤又はルーチン粒剤を散布し、その15～20日後にも同剤を散布する。6月15日以降に発病を確認した場合は、オリゼメート粒剤又はルーチン粒剤の散布に加え、予防剤と治療剤の混合剤（ブラシン剤又はノンブラス剤）の茎葉散布を行う。その後、必要に応じてビーム剤を追加散布する。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 |            |
|---------|---------|------------|
|         | 発 生 時 期 | 発 生 量      |
| 2. ばか苗病 | －       | 多い（前年より多い） |

##### （1）予報の根拠

ア、育苗期巡回調査（5月2～3半旬）における発病箱率は4.0%（平年1.9%）で高く、発病地点率は17.4%（平年11.6%）でやや高かった（ /+）。

##### （2）防除上注意すべき事項

ア、採種ほ周辺のほ場で発病茎を見つけたときは、株ごと抜き取り、泥に埋めて処分する。

| 病 害 虫 名     | 予 報 内 容 |          |
|-------------|---------|----------|
|             | 発 生 時 期 | 発 生 量    |
| 3. イネミズゾウムシ | 早い（前年並） | 平年並（前年並） |

（１）予報の根拠

ア、向こう１か月の気温はほぼ平年並と予報されている（±/±）。

イ、有効積算温度計算シミュレーション（J P P－N E T、気象観測地点：秋田）による越冬後成虫の侵入盛期は５月21日（平年６月７日）、密度盛期は５月27日（平年６月11日）と推定される（－/+）。

ウ、５月１～４半旬の予察灯（６地点）における越冬後成虫の総誘殺数は４頭（平年5.9頭）でやや少なかった（－/－）。

（２）防除上注意すべき事項

ア、６月上旬に越冬後成虫が１株当たり0.3頭（食害株率90%以上に相当）以上の場合は、トレボン粒剤で防除する。

| 病 害 虫 名     | 予 報 内 容 |           |
|-------------|---------|-----------|
|             | 発 生 時 期 | 発 生 量     |
| 4. イネドロオイムシ | 平年並（－）  | やや多い（前年並） |

（１）予報の根拠

ア、向こう１か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている（±/±）。

イ、前年の発生量から、越冬量はやや多いと推定される（－/+）。

（２）防除上注意すべき事項

ア、産卵盛期（６月上～中旬）の卵塊数が１株当たり0.5を超える場合は、ふ化盛期（６月中旬）に茎葉散布剤で防除する。ただし、R A Cコード：1A、1B、2Bの薬剤に対する感受性が低下している地域では、トレボン粉剤D Lを使用する。

| 病 害 虫 名                          | 予 報 内 容 |          |
|----------------------------------|---------|----------|
|                                  | 発 生 時 期 | 発 生 量    |
| 5. イネミギワバエ（第２世代）<br>（イネヒメハモグリバエ） | 早い（－）   | やや少ない（－） |

（１）予報の根拠

ア、向こう１か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多い、日照時間はほぼ平年並と予報されている（±/±）。

イ、有効積算温度計算シミュレーション（J P P－N E T、気象観測地点：秋田）による第２世代幼虫の発生時期は６月３日（平年６月16日）と推定される（－/－）。

ウ、５月中～下旬の巡回調査（沿岸部19地点）における１株当たり卵数は0.01個（平年0.29個）でやや少なかった（－/－）。

（２）防除上注意すべき事項

ア、育苗箱施用剤や育苗箱かん注剤を使用した場合は、あらためて防除をする必要はない。

| 病 害 虫 名                                              | 予 報 内 容                       |                                          |
|------------------------------------------------------|-------------------------------|------------------------------------------|
|                                                      | 発 生 時 期                       | 発 生 量                                    |
| 6. 斑点米カメムシ類（第1世代）<br>（アカスジカスミカメ）<br>（アカヒゲホソミドリカスミカメ） | 早い（前年並）<br>早い（前年並）<br>早い（前年並） | 多い（前年より多い）<br>多い（前年より多い）<br>多い（前年よりやや多い） |

（1）予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている（±/±）。

イ、牧草地すくい取り調査（3地点）におけるアカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメの越冬世代成虫の発生時期はいずれも早かった（－/－）。

ウ、前年収穫期に行った畦畔すくい取り調査から、アカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメの越冬量はいずれも多いと推定される（ /+）。

（2）防除上注意すべき事項

ア、5月16日発表の防除対策情報第1号を参照して、農道・畦畔、休耕田などの除草と水田除草剤を適切に使用する。

イ、一発処理除草剤のフロアブル剤、顆粒水和剤、ジャンボ剤、少量拡散型粒剤は藻類・表層剥離がほ場の30%以上発生しているほ場では拡散性が劣るので、散布は藻類・表層剥離の発生前から発生初期までとする。

ウ、一発処理除草剤の処理時期の遅れなどにより残草が多い場合は、草種に応じた中・後期剤を適切に散布する。

| 病 害 虫 名                      | 予 報 内 容 |               |
|------------------------------|---------|---------------|
|                              | 発 生 時 期 | 発 生 量         |
| 7. フタオビコヤガ（第1世代）<br>（イネアオムシ） | 平年並（－）  | 平年並（前年よりやや多い） |

（1）予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている（±/+）。

イ、育苗期巡回調査（5月2～3半旬）における育苗施設内の成虫数は0.01頭（平年0.31頭）、卵確認地点率は0%（平年4.9%）でいずれも低かった（ /－）。

（2）防除上注意すべき事項

ア、フェルテラ剤（ブイゲットフェルテラ粒剤、D r.オリゼフェルテラ粒剤など）、スピノ剤（プリンススピノ粒剤6、ルーチンアドスピノ箱粒剤など）のいずれも施用せず、食害が多く実害を生じるおそれがある場合は、6月上旬にチューンアップ顆粒水和剤、トレボン粉剤DL、パダン粉剤DLのいずれかを散布する。

8. その他病虫害の発生予報と防除対策

| 病虫害名                       | 発生時期 | 発生量 |     | 防除上注意すべき事項          |
|----------------------------|------|-----|-----|---------------------|
|                            |      | 現況  | 予報  |                     |
| 縞葉枯病                       | －    | －   | 平年並 | 防除が必要なほ場はないと見込まれる。  |
| ニカメイガ<br>（2回発生地帯の<br>第1世代） | －    | －   | 平年並 | 防除が必要なほ場は少ないと見込まれる。 |

## B 小麦

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 |                 |
|---------|---------|-----------------|
|         | 発 生 時 期 | 発 生 量           |
| 1. 赤かび病 | 早い (－)  | やや多い (前年よりやや多い) |

### (1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている (±/+ )。

イ、農業試験場における生育調査 (品種:ネバリゴシ) での出穂期は5月2日 (平年差－11日) だった (－/ )。

ウ、秋田地域振興局管内の定点調査 (品種:銀河のちから) による出穂期は5月5日 (平年差－7日)、仙北地域における出穂期 (ネバリゴシ) は5月9日 (平年差－9日)、平鹿地域における出穂期 (ネバリゴシ) は5月7日 (平年差－12日) だった (－/ )。

エ、出穂後の5月上～中旬の降水量は平年並であり、これまでの感染量は平年並と推定される ( /±)。

### (2) 防除上注意すべき事項

ア、まだ防除を行っていない場合は、直ちにシルバキュアフロアブル (RACコード:3) 又はストロビーフロアブル (同:11) を散布する。その後7～10日後に2回目の防除をする。

イ、2回目の防除は、シルバキュアフロアブル、ストロビーフロアブル、トップジンM水和剤 (RACコード:1)、トップジンM粉剤DL (同:1)、イオウフロアブル (同:M2)、石灰硫黄合剤 (同:M2) のいずれかを散布する。ただし、1回目と同じ薬剤は使用しない。

ウ、耐性菌の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤を連用しない。

| 病 害 虫 名  | 予 報 内 容 |                |
|----------|---------|----------------|
|          | 発 生 時 期 | 発 生 量          |
| 2. うどんこ病 | －       | 平年並 (前年よりやや多い) |

### (1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている ( /+)。

イ、前年乳熟期の発生量から、越冬伝染源量はやや少ないと推定される ( /－)。

### (2) 防除上注意すべき事項

ア、本病は赤かび病と同時防除が可能である。

## 3. その他病害虫の発生予報と防除対策

| 病害虫名 | 発生時期 | 発生量 |     | 防除上注意すべき事項        |
|------|------|-----|-----|-------------------|
|      |      | 現況  | 予報  |                   |
| さび病  | －    | －   | 平年並 | 赤かび病との同時防除が可能である。 |

## C 大豆

| 病 害 虫 名   | 予 報 内 容 |               |
|-----------|---------|---------------|
|           | 発 生 時 期 | 発 生 量         |
| 1. ネキリムシ類 | 早い（前年並） | 平年並（前年よりやや多い） |

### （１）予報の根拠

ア、向こう１か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている（±/±）。

イ、有効積算温度計算シミュレーション（J P P - N E T、気象観測地点：秋田）によると、大豆の茎を切断できる４齢幼虫の発生時期は６月２日（平年６月１７日）と予想される（－/－）。

ウ、秋田市予察ほのフェロモントラップ（タマナヤガ）における４月１半旬～５月４半旬の誘殺数は５３頭（平年５７．０頭）で平年並だった（ / ± ）。

### （２）防除上注意すべき事項

ア、タマナヤガの成虫はタデ、アカザなどの広葉雑草に産卵するので、播種前にはほ場内やほ場周辺の除草を行う。

イ、例年被害が見られるほ場では、次のいずれかの方法で防除する。

① クルーザー F S 30又はクルーザー M A X Xを種子に塗沫処理して播種する。

② 播種時にカルロス粉剤又はカルロス微粒剤 F を作条施用し、土壌混和する。

③ 播種時～本葉２葉期にカルロス粉剤又はネキリエース K を株元の土壌表面に散布する。

ウ、タマナヤガは飛来性害虫であり、飛来数が急激に増加することがあるので、今後の予察情報などに注意する。

| 病 害 虫 名     | 予 報 内 容 |        |
|-------------|---------|--------|
|             | 発 生 時 期 | 発 生 量  |
| 2. 食葉性鱗翅目幼虫 | －       | 平年並（－） |

### （１）予報の根拠

ア、向こう１か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている（ / ± ）。

### （２）防除上注意すべき事項

ア、ツメクサガは年２回発生し、第１世代幼虫は主に６～７月に発生する。葉脈を残して葉を食害するので、ほ場をよく観察する。

イ、発生が多い場合は、ツメクサガ幼虫の発生初期（若齢期）にエルサン乳剤、トレボン乳剤、フェニックスフロアブルを散布する。

## D ねぎ（夏どり）

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 |                |
|---------|---------|----------------|
|         | 発 生 時 期 | 発 生 量          |
| 1. ベと病  | －       | やや多い（前年よりやや多い） |

### （１）予報の根拠

ア、向こう１か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている（ / + ）。

イ、５月４半旬の巡回調査における発病株率は０％（平年０％）で平年並だった（ / ± ）。

### （２）防除上注意すべき事項

ア、気温が１５℃前後で降雨が続くと発病しやすく、被害の拡大が早い。定期的にジマンダイセン水和剤などを散布し、予防に努める。

- イ、発病が見られたらオロンディスウルトラSC（RACコード：40・49）、ザンプロDMフロアブル（同：40・45）、リドミルゴールドMZ（同：4・M3）などを散布する。
- ウ、RACコード：4、11、27、40、45、49の薬剤は、耐性菌の出現を回避するため連用しない。

## E きゅうり

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 |          |
|---------|---------|----------|
|         | 発 生 時 期 | 発 生 量    |
| 1. 黒星病  | —       | 平年並（前年並） |

### （1）予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。
- イ、前年9月の発生量から、越冬伝染源量はやや少ないと推定される（ /-）。

### （2）防除上注意すべき事項

- ア、本病は冷涼多湿条件で発病が多く、県北部で発生しやすい。
- イ、多発すると薬剤による防除が難しくなるため、発病前から定期的にベフドー水和剤、ジマンダイセン水和剤、ダコニール1000などを散布し、予防に努める。特に、前年秋に発病が多かったほ場では定植直後から防除を開始する。
- ウ、発病を確認した場合は、茎葉、果実、巻きひげなどの発病部位を取り除き、速やかにスコア顆粒水和剤、トップジンM水和剤、ベンレート水和剤などを散布する。

## F キャベツ（初夏どり）

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 |              |
|---------|---------|--------------|
|         | 発 生 時 期 | 発 生 量        |
| 1. 菌核病  | —       | やや多い（前年より多い） |

### （1）予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。
- イ、5月4半旬の巡回調査における発病株率は0%（平年0%）で平年並だった（ /±）。

### （2）防除上注意すべき事項

- ア、前年に発病が見られたほ場では、結球始期からスミレックス水和剤、ネクスターフロアブル、パレード20フロアブルなどを散布する。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 |                      |
|---------|---------|----------------------|
|         | 発 生 時 期 | 発 生 量                |
| 2. コナガ  | —       | やや少ない<br>（前年よりやや少ない） |

### （1）予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている（ /±）。
- イ、能代市防除適期決定ほのフェロモントラップにおける5月1～4半旬の誘殺数は188頭（平年197.9頭）で平年並だった（ /±）。
- ウ、5月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0頭（平年0.03頭）でやや少なかった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発生初期で幼虫の密度が低い間は、遅効性だが残効が長い昆虫成長制御剤（IGR剤）又はBT剤を散布する。

イ、生育期から結球期にかけて発生が多くなってきたら、エビセクト水和剤（RACコード：14）、パダンSG水溶剤（同：14）、アフーム乳剤（同：6）、グレーシア乳剤（同：30）、コテツフロアブル（同：13）、スピノエース顆粒水和剤（同：5）、ディアナSC（同：5）、トルネードエースDF（同：22A）、フェニックス顆粒水和剤（同：28）、プレバソンフロアブル5（同：28）を散布する。なお、フェニックス顆粒水和剤、プレバソンフロアブル5は2週間程度の残効があるため、防除回数を減らすことができる。

ウ、薬剤抵抗性が発達しやすいので、同一RACコードの薬剤の連用はせず、異なる薬剤をローテーションして使用する。

| 病 害 虫 名    | 予 報 内 容 |                      |
|------------|---------|----------------------|
|            | 発 生 時 期 | 発 生 量                |
| 3. モンシロチョウ | —       | やや少ない<br>(前年よりやや少ない) |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている（/±）。

イ、5月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0頭（平年0.01頭）でやや少なかった（/—）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、コナガとの同時防除に努める。

| 病 害 虫 名       | 予 報 内 容 |          |
|---------------|---------|----------|
|               | 発 生 時 期 | 発 生 量    |
| 4. ヨトウガ（第1世代） | —       | 平年並（前年並） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている（/±）。

イ、5月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0頭（平年0頭）で平年並だった（/±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、コナガとの同時防除に努める。

## G えだまめ

| 病 害 虫 名   | 予 報 内 容 |               |
|-----------|---------|---------------|
|           | 発 生 時 期 | 発 生 量         |
| 1. ネキリムシ類 | 早い（前年並） | 平年並（前年よりやや多い） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている（±/±）。

イ、有効積算温度計算シミュレーション（JPP-NE T、気象観測地点：秋田）によると、えだ

まめの茎を切断できる4齢幼虫の発生時期は6月2日（平年6月17日）と予想される（－/）。  
 ウ、秋田市大豆予察ほのフェロモントラップ（タマナヤガ）における4月1半旬～5月4半旬の誘殺数は53頭（平年57.0頭）で平年並だった（ /±）。

（2）防除上注意すべき事項

ア、タマナヤガの成虫はタデ、アカザなどの広葉雑草に産卵するので、播種前には場内やほ場周辺の除草を行う。

イ、例年被害が見られるほ場では、次のいずれかの方法で防除する。

- ① クルーザーF S30又はクルーザーMAXXを種子に塗沫処理して播種する。
- ② 播種時にカルホス粉剤又はカルホス微粒剤Fを作条施用し、土壌混和する。
- ③ 播種時～本葉2葉期にカルホス粉剤又はネキリエースKを株元の土壌表面に散布する。

ウ、タマナヤガは飛来性害虫であり、飛来数が急激に増加することがあるので、今後の予察情報などに注意する。

| 病 害 虫 名     | 予 報 内 容 |          |
|-------------|---------|----------|
|             | 発 生 時 期 | 発 生 量    |
| 2. 食葉性鱗翅目幼虫 | －       | 平年並（前年並） |

（1）予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並が多いと予報されている（ /±）。

（2）防除上注意すべき事項

ア、ツメクサガは年2回発生し、第1世代幼虫は主に6～7月に発生する。葉脈を残して葉を食害するため、ほ場をよく観察する。

イ、発生が多い場合は、ツメクサガ幼虫の発生初期（若齢期）にアディオン乳剤、トレボン乳剤、フェニックスフロアブル、プロフレアSCを散布する。

## H りんどう

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 |              |
|---------|---------|--------------|
|         | 発 生 時 期 | 発 生 量        |
| 1. 葉枯病  | －       | やや多い（前年より多い） |

（1）予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並が多いと予報されている（ /+）。

イ、5月中旬の巡回調査における発病茎率は4.9%（平年6.0%）で平年並だった（ /±）。

（2）防除上注意すべき事項

ア、過剰な追肥を控え、過繁茂を避ける。

イ、オンリーワンフロアブル、ベフラン液剤25などの薬剤で防除するが、花の汚れを避けるためにオーソサイド水和剤80やZボルドーは着蕾期以降使用しない。

| 病 害 虫 名                | 予 報 内 容 |             |
|------------------------|---------|-------------|
|                        | 発 生 時 期 | 発 生 量       |
| 2. リンドウホソハマキ<br>(第1世代) | 早い (－)  | 多い (前年より多い) |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている (±/±)。

イ、有効積算温度計算シミュレーション (J P P－N E T、気象観測地点：秋田) による越冬世代成虫の羽化始期は5月18日 (平年6月1日) だった (－/ )。

ウ、5月中旬の巡回調査における発生茎率は0.2% (平年0.0%) で高かった ( /+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、5月22日発表の防除対策情報第2号を参照して防除する。

| 病 害 虫 名         | 予 報 内 容 |          |
|-----------------|---------|----------|
|                 | 発 生 時 期 | 発 生 量    |
| 3. ハダニ類 (ナミハダニ) | －       | 多い (前年並) |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている ( /±)。

イ、5月中旬の巡回調査における発生茎率は1.1% (平年0%) だった ( /+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、多発してからでは防除が困難となるため、葉表に白斑が見られたら直ちにカネマイトフロアブル (R A Cコード：20B)、コロマイト水和剤 (同：6)、バロックフロアブル (同：10B) などの薬剤で防除する。

イ、抵抗性害虫の出現を回避するため、同一R A Cコードの薬剤は連用しない。

## I りんご

| 病 害 虫 名  | 予 報 内 容     |               |
|----------|-------------|---------------|
|          | 発 生 時 期     | 発 生 量         |
| 1. 斑点落葉病 | 早い (前年より早い) | 平年並 (前年より少ない) |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている (±/+)。

イ、ふじの落花期はかづの果樹センター (鹿角市) が5月9日 (平年差－8日)、果樹試験場 (横手市) が5月5日 (平年差－8日) だった (－/ )。

ウ、前年9月の発生量から、越冬伝染源量はやや少ないと推定される ( /－)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、防除薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。

イ、高温・多雨の多発条件下では、ポリオキシシ AL 水和剤 (R A Cコード：19)、ユニックス顆粒水和剤47 (同：9) のいずれかを主剤に加用して使用する。ただし、これらの剤は年1回の使用とする。また、ポリオキシシ AL 水和剤の効力が低下している園地では同剤を使用しない。

ウ、Q o I 剤 (R A Cコード：11) は耐性菌の出現を回避するため、年2回以内の使用とし、ベルクト水和剤、有機銅剤などを加用する。

エ、以下の各薬剤を使用する際は、次の点に注意する。

- ① オキシラン水和剤、キノンドー水和剤40、キノンドーフロアブル、ドキリンフロアブル、ポリオキシシリンAL水和剤は、落花直後～落花20日後頃の使用は避ける（サビ果）。
- ② シトラノフロアブル、パスポート顆粒水和剤は、開花直前～落花20日後頃の使用は避ける（サビ果）。
- ③ ダイパワー水和剤、ベルコート水和剤は、芽出し2週間後～落花25日後頃の使用は避ける（サビ果）。
- ④ ベフラン液剤25、ベフキノン水和剤は、芽出し2週間後～落花40日後頃の使用は避ける（サビ果）。また、千秋、王林では7月上旬までの散布で果実色に障害を生じることがある。
- ⑤ ストライド顆粒水和剤は、開花後～落花30日後の使用は避ける（サビ果）。

| 病 害 虫 名               | 予 報 内 容 |            |
|-----------------------|---------|------------|
|                       | 発 生 時 期 | 発 生 量      |
| 2. モニリア病<br>(実(株)ぐされ) | —       | やや少ない(前年並) |

(1) 予報の根拠

ア、5月中旬の巡回調査における実(株)ぐされ発病果そう率は0.03%(平年0.07%)でやや低かった( / - )。

イ、5月上～中旬の降水量は平年並であり、5月の感染量は平年並と推定される( / ± )。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、実(株)ぐされは見つけ次第、摘み取って焼却するか土中に埋める。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 |           |
|---------|---------|-----------|
|         | 発 生 時 期 | 発 生 量     |
| 3. 黒星病  | —       | やや多い(前年並) |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている( / + )。

イ、5月中旬の巡回調査における発病花そう率は0%(平年0.1%)で平年並だった( / ± )。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病部位は直ちに摘み取り適切に処分する。摘果作業の際は発病の有無をよく観察し、発病果実を園内に残さないように注意する。

イ、過繁茂を防ぐため、新梢などの生育が旺盛な場合は、枝の配置を見直し徒長枝を整理する。

ウ、落花25日後までは10日間隔で防除し、その後は2週間間隔で散布する。降雨が続くと予想される場合は、散布間隔を短くする。散布予定日に降雨が予想される場合は、降雨前に散布する。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 |         |
|---------|---------|---------|
|         | 感 染 時 期 | 感 染 量   |
| 4. 炭疽病  | 早い( - ) | 多い( - ) |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている( ± / + )。

イ、ふじの落花期はかづの果樹センター(鹿角市)が5月9日(平年差-8日)、果樹試験場(横手市)が5月5日(平年差-8日)だった( - / )。

ウ、前年収穫期の発生量から、越冬伝染源量は多いと推定される（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、園地の近くにあるニセアカシアは伐採する。

イ、二次感染防止のため被害果は見つけ次第、摘み取って土中に埋める。

ウ、防除薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は、散布間隔を短くする。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 |       |
|---------|---------|-------|
|         | 感 染 時 期 | 感 染 量 |
| 5. 輪紋病  | 早い（－）   | 多い（－） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている（±/+）。

イ、ふじの落花期はかづの果樹センター（鹿角市）が5月9日（平年差－8日）、果樹試験場（横手市）が5月5日（平年差－8日）だった（－/ ）。

ウ、前年収穫期の発生量から、越冬伝染源量はやや多いと推定される（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、防除薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は、散布間隔を短くする。

イ、枝幹のいぼ病斑は削り取り、トップジンMペーストを塗布する。なお、本剤の使用回数は3回以内である。

| 病 害 虫 名                 | 予 報 内 容    |         |
|-------------------------|------------|---------|
|                         | 発 生 時 期    | 発 生 量   |
| 6. シンクイムシ類<br>（モモシンクイガ） | 早い（前年より早い） | 多い（前年並） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の平均気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている（±/±）。

イ、横手市予察ほにおける越冬世代成虫の初誘殺は5月4半旬（平年6月1半旬）で早かった（－/ ）。

ウ、前年9月の発生量から、越冬量は多いと推定される（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、被害果は摘み取り、6日以上水漬けする。

イ、成虫は20～22時の気温が18℃以上になると産卵を開始するので、県北部では6月3半旬頃から、県中央部・県南部では6月2半旬頃からネオニコチノイド剤などの殺卵剤を散布する。

ウ、交信かく乱剤の使用を予定している場合は、直ちに設置する。

エ、園地の周辺に放任園や防除不良園がある場合は、発生動向に注意して防除する。

オ、サイアノックス水和剤、スミチオン水和剤40（RACコード：1B）、パーマチオン水和剤（同：3A・1B）は、サビ果を発生させるおそれがあるので、落花後1か月間は使用しない。また、スミチオン水和剤40、パーマチオン水和剤は、薬害（黄変落葉）を発生させるおそれがあるので、高温時や衰弱樹には散布しない。

| 病 害 虫 名                   | 予 報 内 容 |              |
|---------------------------|---------|--------------|
|                           | 発 生 時 期 | 発 生 量        |
| 7. ハダニ類<br>(ナミハダニ、リンゴハダニ) | —       | 平年並（前年より少ない） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている（ /±）。

イ、5月中旬の巡回調査におけるナミハダニとリンゴハダニの葉当たり発生頭数は合計0頭（平年0.0頭）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、ナミハダニの発生の多い園地では、直ちに殺ダニ剤を散布する。

イ、リンゴハダニの発生が見られる園地ではバロックフロアブル（RACコード：10B）などを散布する。

ウ、ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、殺ダニ剤は1薬剤年1回の使用に限定し、かつ作用点が同一の剤も年1回の使用として、効力低下を防ぐ。

エ、ダニサラバフロアブル（RACコード：25A）、スターマイトフロアブル（同：25A）、ダニコングフロアブル（同：25B）は作用点が同一のため、連用を避ける。

オ、以下の各薬剤の混用をする場合は、次の点に注意する。

- ① オマイト水和剤は薬害（黄変落葉）が発生することがあるので8月中旬以降に使用する。
- ② コロマイト乳剤は、落花後1か月間（サビ果）、高温時（黄変落葉）に散布しない。また、パスポート顆粒水和剤、ストライド顆粒水和剤及びスミチオン水和剤40は本剤と混用しない（葉の黄変、葉裏の褐変）。
- ③ カネマイトフロアブルとアリエッティC水和剤を混用する場合は、先にカネマイトフロアブルを希釈する（凝集の回避）。
- ④ マイトコーネフロアブルとアリエッティC水和剤又はベフラン液剤25を混用する場合は、先にマイトコーネフロアブルを希釈する（凝集の回避）。また、マイトコーネフロアブルはスミチオン水和剤40と混用しない（黄変落葉）。
- ⑤ コテツフロアブルは、アリエッティC水和剤又はベフラン液剤25との混用で凝集が認められるので、攪拌しながら散布する。
- ⑥ ダニサラバフロアブルとアリエッティC水和剤又はカルシウム剤を混用する場合は、先にダニサラバフロアブルを希釈し、よく攪拌する（凝集の回避）。
- ⑦ スターマイトフロアブルとアリエッティC水和剤又はベフラン液剤25を混用する場合は、先にスターマイトフロアブルを希釈する（凝集の回避）。
- ⑧ ダニオーテフロアブルを使用する園では、銅剤（銅を含む製剤）を使用しない（銅剤と混用又は近接散布での防除効果の低下）。

| 病 害 虫 名                                                | 予 報 内 容 |                |
|--------------------------------------------------------|---------|----------------|
|                                                        | 発 生 時 期 | 発 生 量          |
| 8. ハマキムシ類<br>(リンゴコカクモンハマキ、<br>ミダレカクモンハマキ、<br>リンゴモンハマキ) | —       | 平年並 (前年よりやや多い) |

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている ( /±)。  
 イ、5月中旬の巡回調査における被害花そう率は0.2% (平年0.2%) で平年並だった ( /±)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、防除薬剤は、オリオン水和剤40 (RACコード: 1A)、ディアナWDG (同: 5)、  
 ジアミド剤 (サムコフロアブル10、エクレシルSEなど) (同: 28) のいずれかを散布する。

| 病 害 虫 名                                | 予 報 内 容 |                    |
|----------------------------------------|---------|--------------------|
|                                        | 発 生 時 期 | 発 生 量 (飛 来 量)      |
| 9. 果樹カメムシ類<br>(クサギカメムシ、<br>チャバネアオカメムシ) | —       | やや多い<br>(前年よりやや多い) |

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている ( /±)。  
 イ、防除適期決定ほ (6地点) における5月1～4半旬のチャバネアオカメムシフェロモントラップへの果樹カメムシ類の平均誘殺数は14.3頭 (平年11.9頭) でやや多かった ( /+)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、園内への飛来時期や飛来数は地域によって異なるので、飛来状況をよく観察する。特に、山間部の園地では注意する。  
 イ、園内への飛来が多い場合は、アクタラ顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤、スタークル顆粒水溶剤、ダントツ水溶剤などを散布する。  
 ウ、スミチオン水和剤40は、サビ果を発生させるおそれがあるので、落花後1か月間は使用しない。  
 また、スミチオン水和剤40は薬害 (黄変落葉) を発生させるおそれがあるので、高温時や衰弱樹には散布しない。

| 病 害 虫 名               | 予 報 内 容 |                     |
|-----------------------|---------|---------------------|
|                       | 発 生 時 期 | 発 生 量               |
| 10. キンモンホソガ<br>(第2世代) | —       | やや多い<br>(前年よりやや少ない) |

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている ( /±)。  
 イ、前年9月の発生量から、越冬量はやや多いと推定される ( /+)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、第1世代幼虫の被害が多いひこばえを切り取る。  
 イ、被害葉は摘み取り適切に処分する。  
 ウ、発生が多い園地では、県北部では6月2～3半旬、中央部・県南部では6月1～2半旬にモス

ピラン顆粒水溶剤やバリアード顆粒水和剤などの防除剤を散布する。

エ、パーマチオン水和剤は、落花 1 か月後以降に使用し（サビ果）、高温時や衰弱樹に散布しない（黄変落葉）。

## J なし（日本なし）

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 |                 |
|---------|---------|-----------------|
|         | 発 生 時 期 | 発 生 量           |
| 1. 黒星病  | －       | やや多い（前年よりやや少ない） |

### （1）予報の根拠

ア、向こう 1 か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

イ、5 月中旬の巡回調査における発病果そう基部率は 0.1%（平年 0.1%）で平年並だった（ /±）。

### （2）防除上注意すべき事項

ア、発病部位は早めに除去し、園外へ搬出して処分する。

イ、防除薬剤の散布は 10 日間隔で行い、降雨が続くと予想される場合又は発病している園地では散布間隔を 7 日とする。幸水は、本病に弱いので特に注意して防除する。

ウ、有袋栽培の場合は必ず防除剤を散布した後に袋をかける。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 |            |
|---------|---------|------------|
|         | 発 生 時 期 | 発 生 量      |
| 2. 黒斑病  | －       | 多い（前年より多い） |

### （1）予報の根拠

ア、向こう 1 か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

イ、5 月中旬の巡回調査における発病果そう葉率は 1.1%（平年 0.1%）、発病地点率は 100%（平年 26.7%）でいずれも高かった（ /+）。

### （2）防除上注意すべき事項

ア、5 月 22 日発表の防除対策情報第 3 号を参照して防除する。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容      |         |
|---------|--------------|---------|
|         | 感 染 時 期      | 感 染 量   |
| 3. 輪紋病  | やや遅い（前年より遅い） | やや多い（－） |

### （1）予報の根拠

ア、向こう 1 か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている（±/+）。

イ、潟上市予察ほにおけるいぼ病斑からの柄胞子溢出開始日は、5 月 24 日（平年 5 月 20 日）でやや遅かった（+ / ）。

ウ、前年収穫期の発生量から、越冬伝染源量は平年並と推定される（ /±）。

### （2）防除上注意すべき事項

ア、伝染源であるいぼ病斑の多い枝は切除し焼却処分する。枝幹の病斑は 6 月中旬までに削り取り、直後にその跡部にトップジン M ペーストを塗布する（塗布は 3 回以内）。

イ、発病しやすい品種は、6 月中旬までに袋かけをする。

ウ、防除薬剤の散布は 10 日間隔で行う。高温、多雨の場合は 7 日間隔程度とする。

| 病 害 虫 名                 | 予 報 内 容  |        |
|-------------------------|----------|--------|
|                         | 発 生 時 期  | 発 生 量  |
| 4. シンクイムシ類<br>(モモシンクイガ) | 早い (前年並) | 多い (－) |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている(±/±)。

イ、横手市予察ほにおける越冬世代成虫の初誘殺は、5月4半旬(平年6月1半旬)で早かった(－/ )。

ウ、前年9月の発生量から、越冬量は多いと推定される( /+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、被害果は第2世代の発生源となるので必ず摘み取り、6日以上水漬けする。

イ、成虫は20～22時の気温が18℃以上になると産卵を開始するので、県北部では6月3半旬頃から、県中央部では6月2半旬頃からネオニコチノイド剤などの殺卵剤を散布する。

ウ、モスピラン顆粒水溶剤(RACコード:4A)は、長十郎、新高、八雲、愛甘水に対して薬害のおそれがあるので散布しない(葉裏に黒色斑)。

エ、園地の周辺に放任園や防除不良園がある場合は、発生動向に注意して防除する。

| 病 害 虫 名                   | 予 報 内 容 |                      |
|---------------------------|---------|----------------------|
|                           | 発 生 時 期 | 発 生 量                |
| 5. ハダニ類<br>(ナミハダニ、リンゴハダニ) | －       | やや少ない<br>(前年よりやや少ない) |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている( /±)。

イ、5月中旬の巡回調査におけるナミハダニとリンゴハダニの葉当たり発生頭数は、合計で0頭(平年0.002頭)でやや少なかった( /－)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、不要な徒長枝は早めに剪去し、適切に処分する。

イ、発生が多い園地では直ちに殺ダニ剤を散布する。

ウ、ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいため、殺ダニ剤は1薬剤年1回の使用に限定し、かつ作用点が同一の薬剤も年1回の使用として、効力低下を防ぐ。

エ、コロマイト水和剤は葉が柔らかい時期(5～6月)や高温・乾燥時、樹勢の弱っている樹で、葉に薬害(黄変落葉)を生じるおそれがあるので散布しない。

オ、ダニオーテフロアブル(RACコード:33)を使用する園では、オキシラン水和剤(同:M4・M1)などの銅を含む製剤を使用しない(銅剤と混用及び近接散布での防除効果の低下)。

| 病 害 虫 名                                 | 予 報 内 容 |                     |
|-----------------------------------------|---------|---------------------|
|                                         | 発 生 時 期 | 発 生 量               |
| 6. ハマキムシ類<br>(リンゴコカクモンハマキ、<br>リンゴモンハマキ) | —       | やや多い<br>(前年よりやや少ない) |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている（ /－）。

イ、5月中旬の巡回調査において、1地点でミダレカクモンハマキによる被害が多発したため、被害新梢率は2.6%（平年0.0%）で高かった（ /＋）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発生が多い園地ではジアミド系剤などを散布する。

| 病 害 虫 名                                | 予 報 内 容 |                    |
|----------------------------------------|---------|--------------------|
|                                        | 発 生 時 期 | 発 生 量 (飛 来 量)      |
| 7. 果樹カメムシ類<br>(クサギカメムシ、<br>チャバネアオカメムシ) | —       | やや多い<br>(前年よりやや多い) |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、防除適期決定ほ（4地点）における5月1～4半旬のチャバネアオカメムシフェロモントラップへの果樹カメムシ類の平均誘殺数は26.5頭（平年16.0頭）でやや多かった（ /＋）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、園内への飛来時期は年次変動が大きく、飛来数も場所によって異なることから、飛来状況をよく観察して防除する。

イ、園内への飛来が多い場合はネオニコチノイド剤、有機リン剤、合成ピレスロイド剤のいずれかを散布する。ただし、合成ピレスロイド剤は6月下旬以降の使用とする。

8. その他病害虫の発生予報と防除対策

| 病害虫名                   | 発生時期 | 発生量 |     | 防除上注意すべき事項              |
|------------------------|------|-----|-----|-------------------------|
|                        |      | 現況  | 予想  |                         |
| アブラムシ類<br>(ユキヤナギアブラムシ) | —    | 平年並 | 平年並 | シンクイムシ類、果樹カメムシ類と同時防除する。 |

## K ぶどう

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 |                |
|---------|---------|----------------|
|         | 感 染 時 期 | 感 染 量          |
| 1. ベと病  | 早い（－）   | やや多い（前年よりやや多い） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている（±/＋）。

イ、果樹試験場（横手市）における展葉期は、キャンベル・アーリーが4月22日（平年差－9日）、

巨峰が4月24日（平年差－10日）、シャインマスカットが4月24日（平年差－10日）だった（－/ ）。

ウ、5月中旬の巡回調査における発病葉率は0%（平年0%）で平年並だった（ /±）。

（2）防除上注意すべき事項

ア、アリエッティ水和剤は果粒が小豆大以降の散布で薬害や果粉の溶脱のおそれがあるため、落花7日後までに使用する。

イ、ホライズンドライフフロアブルは果粒が小豆大以降の散布で、アミスター10フロアブル、ストロビードライフフロアブル、フェスティバル水和剤、ベトファイター顆粒水和剤、ライメイフロアブル、ランマンフロアブルは果粒が大豆大以降の散布で、それぞれ果粉の溶脱を起こすおそれがあるため、散布時期に注意する。

ウ、QoI剤（RACコード：11）、QiI剤（同：21）、カルボン酸アミド剤（同：40）、シモキサニル（同：27）を含む農薬及びエトフィンフロアブル（同：22）は使用回数を1～2回とし、同一系統薬剤を連用しない。特に、QoI剤の耐性菌が確認されている地域では、本剤をべと病防除薬剤として使用しない。

エ、ゾーバックユニベル顆粒水和剤（RACコード：49・M3）は1回の使用とする。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 |        |
|---------|---------|--------|
|         | 感 染 時 期 | 感 染 量  |
| 2. 芽枯病  | 早い（－）   | 平年並（－） |

（1）予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている（±/+）。

イ、果樹試験場（横手市）における展葉期は、キャンベル・アーリーが4月22日（平年差－9日）、巨峰が4月24日（平年差－10日）、シャインマスカットが4月24日（平年差－10日）だった（－/ ）。

ウ、5月中旬の巡回調査における発病芽率は、0.2%（平年1.9%）でやや低かった（ /－）。

（2）防除上注意すべき事項

ア、発病枝は剪去し、適切に処分する。

イ、開花期間に雨が多いと翌春に多発するおそれがあるので、オーシャイン水和剤（RACコード：3）、トップジンM水和剤（同：1）、ベンレート水和剤（同：1）のいずれかを開花前に散布する。開花期は平年より早まると予想されるため、散布が遅れないように注意する。

ウ、上記の剤は耐性菌の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤の使用回数を1～2回とし、連用しない。

| 病 害 虫 名  | 予 報 内 容 |                 |
|----------|---------|-----------------|
|          | 発 生 時 期 | 発 生 量           |
| 3. 灰色かび病 | －       | やや多い（前年よりやや少ない） |

（1）予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

イ、5月中旬の巡回調査における発病葉率は0%（平年0%）で平年並だった（ /±）。

（2）防除上注意すべき事項

ア、花冠、不受精果などの花器残さは成熟果での伝染源となるので、果粒肥大前（袋かけ前）に払い落とす。

イ、発病花穂や発病葉のほか、落葉や芽かきした枝葉も伝染源となるため、適切に処分する。

- ウ、花穂の防除が重要であることから、開花前と落花後の散布間隔を10日以上空けない。
- エ、フルーツセイバーは果粒が小豆大以降の散布により、ミギワ20フロアブル、カナメフロアブル、アミスター10フロアブル、ストロビードライフロアブル及びスイッチ顆粒水和剤は、いずれも果粒が大豆大以降の散布により果粉溶脱を起こすおそれがあるので、その前までに散布する。
- オ、カンタスドライフロアブルは浸透性を高める効果のある展着剤や葉面散布剤を加用すると薬害（葉の白化）が発生するおそれがあるため混用しない。
- カ、開花直前にゲッター水和剤（RACコード：10・1）、チオノックフロアブル（同：M3）、トレノックスフロアブル（同：M3）、フルピカフロアブル（同：9）、ロブラール水和剤（同：2）、SDHI剤（ネクスターフロアブル、パレード15フロアブルなど）（同：7）、ミギワ20フロアブル（同：52）のいずれかを散布する。開花期は平年より早まると予想されるため、散布が遅れないように注意する。
- キ、落花直後にゲッター水和剤、ジチオカーバメート剤、フルピカフロアブル、ロブラール水和剤、SDHI剤（フルーツセイバーなど）、QoI剤（アミスター10フロアブル、ストロビードライフロアブルなど）（RACコード：11）、スイッチ顆粒水和剤（同：9・12）のいずれかを散布する。
- ク、落花7日後にQoI剤、スイッチ顆粒水和剤、オンリーワンフロアブル（RACコード：3）のいずれかを散布する。
- ケ、チオノックフロアブル、トレノックスフロアブルを除くエ〜クに記した剤は、耐性菌の出現を回避するため、いずれの剤も1回の使用に限定し、かつ同一RACコードの薬剤は連用しない。
- コ、チオノックフロアブル、トレノックスフロアブルは幼果期〜袋かけまでの散布は、果房の汚れや果粉溶脱を生じることがあるので注意する。

| 病 害 虫 名      | 予 報 内 容 |                |
|--------------|---------|----------------|
|              | 発 生 時 期 | 発 生 量          |
| 4. 晩腐病（花蕾発病） | —       | やや多い（前年よりやや多い） |

#### （1）予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。
- イ、前年収穫期の発生量から、越冬伝染源量は平年並と推定される（ /±）。

#### （2）防除上注意すべき事項

- ア、発病花穂は摘み取り、適切に処分する。
- イ、笠かけ、袋かけは防除効果が高いので、できるだけ早く始め、遅くとも7月中旬までに終える。
- ウ、開花前にジチオカーバメート剤（ジマンダイセン水和剤、チオノックフロアブルなど）（RACコード：M3）、ゾーベックエニベル顆粒水和剤（同：49・M3）のいずれかを散布する。開花期は平年より早まると予想されるため、散布が遅れないように注意する。
- エ、落花直後にジチオカーバメート剤、ゾーベックエニベル顆粒水和剤、スイッチ顆粒水和剤（RACコード：9・12）、QoI剤（アミスター10フロアブル、ストロビードライフロアブルなど）（同：11）のいずれかを散布する。
- オ、落花7日後にオンリーワンフロアブル（RACコード：3）、スイッチ顆粒水和剤、QoI剤のいずれかを散布する。
- カ、アミスター10フロアブル、ストロビードライフロアブル及びスイッチ顆粒水和剤は、いずれも果粒が大豆大以降の散布により果粉溶脱を起こすおそれがあるので、その前までに散布する。
- キ、ジマンダイセン水和剤、チオノックフロアブル、トレノックスフロアブルを除くウ〜カに記した剤は、耐性菌の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤の使用を1〜2回に限定し、かつ同一RACコードの薬剤は連用しない。

ク、チオノックフロアブル、トレノックスフロアブルは幼果期～袋かけまでの散布は、果房の汚れや果粉溶脱を生じることがあるので注意する。

| 病 害 虫 名                   | 予 報 内 容 |          |
|---------------------------|---------|----------|
|                           | 発 生 時 期 | 発 生 量    |
| ５．アザミウマ類<br>(チャノキイロアザミウマ) | 平年並（－）  | 平年並（前年並） |

（１）予報の根拠

ア、向こう１か月の気温はほぼ平年並と予報されている（±/±）。

イ、横手市予察ほにおける黄色粘着板へのチャノキイロアザミウマの５月１～４半旬の誘殺数は０頭（平年０.０頭）で平年並だった（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

ア、発生が見られたら、ディアナWDG（RACコード：５）、テッパン液剤（同：28）、合成ピレスロイド剤（スカウトフロアブル、バイスロイドEWなど）（同：3A）、ネオニコチノイド剤（ダントツ水溶剤、モスピラン顆粒水溶剤など）（同：4A）を散布する。なお、バイスロイドEWは小粒種ぶどうに登録がなく、大粒種ぶどうでのみ使用できる。

イ、合成ピレスロイド剤の使用回数は１～２回とする。

ウ、ダントツ水溶剤は小豆大期以降、モスピラン顆粒水溶剤やバイスロイドEW、ディアナWDG、テッパン液剤は大豆大期以降の散布で果粉溶脱を生じのおそれがあり、その前又は袋かけ以降に使用する。

## L 飼料作物

| 病 害 虫 名       | 予 報 内 容 |                  |
|---------------|---------|------------------|
|               | 発 生 時 期 | 発 生 量            |
| １．アワヨトウ（第１世代） | －       | やや少ない（前年よりやや少ない） |

（１）予報の根拠

ア、糖蜜トラップ調査（２地点）における５月１～４半旬の侵入世代の総誘殺数は０頭（平年０.６頭）でやや少なかった（ /－）。

（２）防除上注意すべき事項

ア、本種は飛来性害虫であり、飛来数が急激に増加することがあるので、今後の予察情報に注意する。

## IV. 気象予報

令和6年5月23日仙台管区气象台発表 東北地方1か月予報（5月25日～6月24日）

（1）予報のポイント

- ・ 期間のはじめは低気圧や前線の影響を受けやすいため、向こう1か月の降水量は平年並か多いでしょう。

（2）向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（東北日本海側）

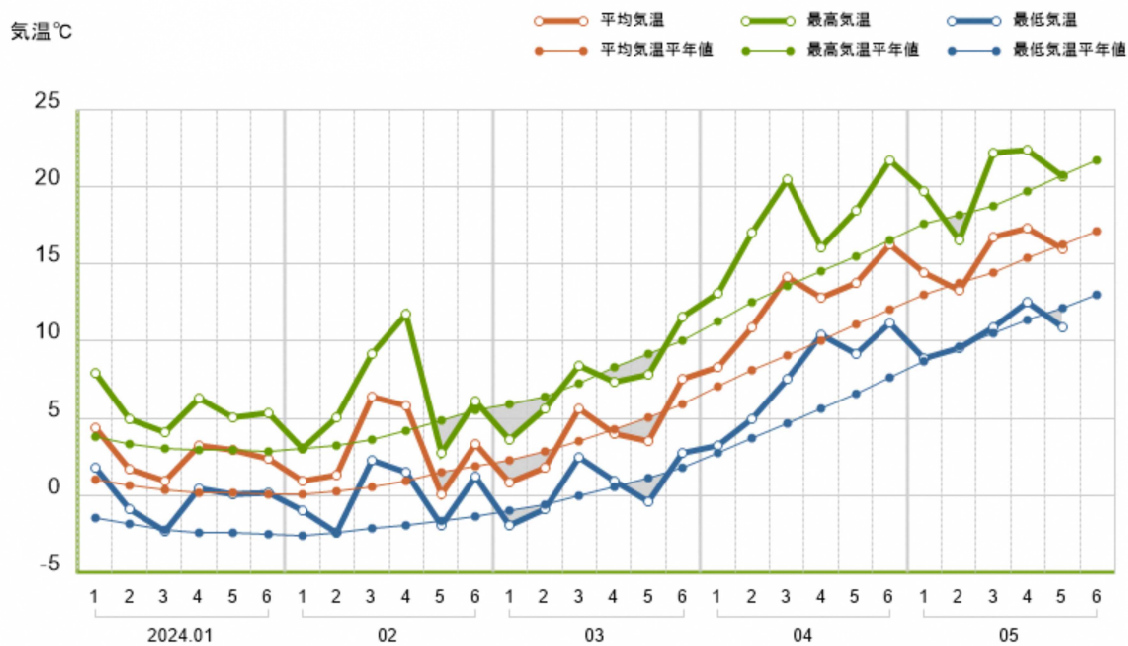
|      | 低い（少ない） | 平年並 | 高い（多い） |
|------|---------|-----|--------|
| 気 温  | 30%     | 40% | 30%    |
| 降水量  | 20%     | 40% | 40%    |
| 日照時間 | 30%     | 40% | 30%    |

（3）気温経過の各階級の確率（東北日本海側）

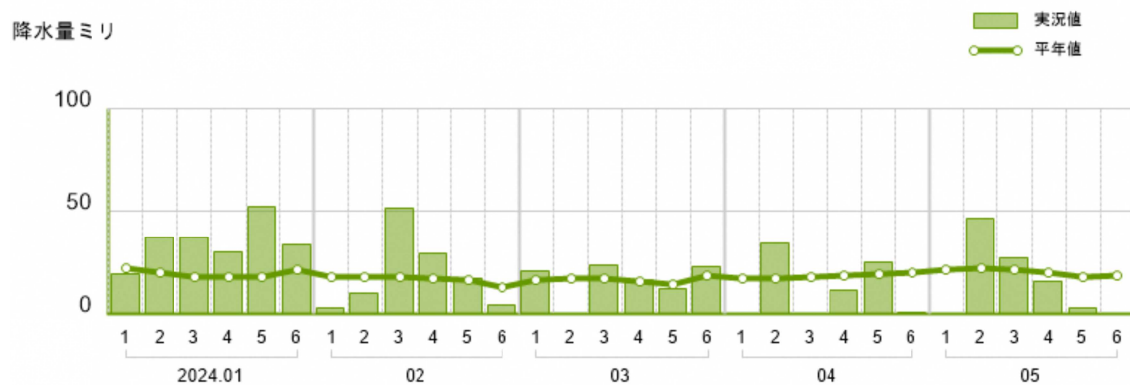
|                 | 低い  | 平年並 | 高い  |
|-----------------|-----|-----|-----|
| 5/25～5/31（1週目）  | 40% | 40% | 20% |
| 6/1～6/7（2週目）    | 40% | 40% | 20% |
| 6/8～6/21（3～4週目） | 20% | 30% | 50% |

## V. 気象データ (秋田市、1月1半旬～5月5半旬 秋田県農業気象システムより)

### 気温の推移



### 降水量の推移



### 日照時間の推移



## VI. 用語の説明

### 発生時期

平年の発生月日からの差を5段階評価で予測します。

|    |      |      |    |    |     |    |               |    |    |      |    |    |      |
|----|------|------|----|----|-----|----|---------------|----|----|------|----|----|------|
| 日数 | ～ -6 | -5   | -4 | -3 | -2  | -1 | 平年<br>発生<br>日 | +1 | +2 | +3   | +4 | +5 | +6 ～ |
| 評価 | 早い   | やや早い |    |    | 平年並 |    |               |    |    | やや遅い |    |    | 遅い   |

### 発生量

発生密度の平年値からの差を5段階評価で予測します。密度のばらつきの差で示されるので、毎年発生密度が大きく変化する病害虫では、平年値からよほど大きくずれないと「多い」や「少ない」の評価にはなりません。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多い」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少ない」でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

| 平年値 |     |       |     |     |      |     |
|-----|-----|-------|-----|-----|------|-----|
| 度数  | 10% | 20%   | 20% | 20% | 20%  | 10% |
| 評価  | 少ない | やや少ない | 平年並 |     | やや多い | 多い  |

### 予報内容の「－」

予報内容の発生時期や発生量の「－」（ハイフン）は、予察対象の病害虫が既に発生している、または、発生時期や発生量が不明なことを示します。

### 予報の根拠

予報の根拠に示している（ / ）は予察の要因で、（発生時期/発生量）を表しています。

発生時期の根拠の記号は「+」（プラス）が遅くなる要素、「－」（マイナス）が早くなる要素、「±」（プラスマイナス）はどちらともいえない要素を示しています。発生量の根拠の記号は「+」（プラス）が多くなる要素、「－」（マイナス）が少なくなる要素、「±」（プラスマイナス）はどちらともいえない要素を示しています。「空欄」は予報の根拠に関係しないことを示します。

### 気象予報

出現が見込まれる確率予報は、高い（多い）確率が50％以上の場合は「高い（多い）」、低い（少ない）確率が50％以上の場合は「低い（少ない）」となります。低い（少ない）確率が20％で平年並と高い（多い）確率がそれぞれ40％の場合は「平年並か高い（多い）」、低い（少ない）と平年並が40％で高い（多い）が20％の場合は「平年並か低い（少ない）」となります。また、それぞれの確率が30～40％の場合は「ほぼ平年並」となります。

| 出現確率(低い(少ない):平年並:高い(多い))         | 解 説         |
|----------------------------------|-------------|
| 高い(多い)確率が50%以上                   | 高い(多い)      |
| (20:40:40)                       | 平年並か高い(多い)  |
| 平年並の確率が50%以上                     | 平年並         |
| (40:30:30) (30:40:30) (30:30:40) | ほぼ平年並       |
| (40:40:20)                       | 平年並か低い(少ない) |
| 低い(少ない)確率が50%以上                  | 低い(少ない)     |

### 半旬のとり方

ここで扱われる「半旬」とは暦日半旬のことで、毎月1日から5日ごとに区切った期間となります。1半旬は1日から5日まで、2半旬は6日から10日までであり、以降6半旬まで5日ごとに該当する期間を指します。

令和6年度秋田県農薬危害防止運動  
～農薬を安全に正しく使いましょう！～

6月1日から8月31日まで「農薬危害防止運動」の実施期間です。  
農薬の安全かつ適正な使用及び管理を徹底しましょう。



[https://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n\\_tekisei/](https://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_tekisei/)

農薬の適正使用 農林水産省

検索



令和6年度農薬危害防止運動 農林水産省・厚生労働省・環境省・都道府県共催

秋田県・秋田県植物防疫協会  
令和6年6月1日～8月31日

秋田県植物防疫協会

問合せ先

秋田県病害虫防除所 TEL 018-881-3660  
秋田県農業試験場 TEL 018-881-3326

秋田県果樹試験場 TEL 0182-25-4224  
かづの果樹センター TEL 0186-25-3231  
天王分場チーム TEL 018-878-2251